

論文審査の結果の要旨

論文提出者：久世恭子

論文題目：英語教育における文学教材の意義—事例分析による再検討—

(The Role of Literary Texts in EFL Classrooms: A Reexamination Through the Analysis of Case Studies)

本論文は、日本の学校英語教育において文学教材の使用が敬遠されるに至った歴史を概観し、さらに当該分野に関する英米の理論を検証したのち、日本の大学英語教育における文学教材の使用実践を事例分析することにより、日本の英語教育における文学教材の意義を具体的な使用場面に即して論じるとともに、それをを用いたさまざまな教授法を提示したものである。

本論文は7章構成になっている。まず序論たる第1章では、英語文学教材の使用に関する本論文の目的と研究課題が提示され、さらに英語教育における「文学教材」という場合に問題となる「文学」および‘literature’の定義が検討される。そして、結局のところそれぞれの概念を一義的に説明することが困難であるとの認識に基づき、辞書的な定義や文学／非文学の二項対立ではなく、文学らしさを言わば一つのクライン(連続変異)として捉えて、小説、詩、戯曲ばかりでなく、随筆、児童文学、歌詞、手紙、自伝、日記も含む創造的なテキストを文学教材に含める立場を明確にする。第2章では、日本を中心として、外国語教育の現場で文学教材が周辺に追いやられてきた歴史(明治初頭～現在)が概観され、一方、1980年代以降、WiddowsonやCarterらによる教育的文体論とインプットを重視するコミュニカティブな外国語教育などを推進力として英米で盛んになった文学教材使用の理論が紹介される。そして、英米において文学教材の再評価の機運が高まったにもかかわらず日本でそれが本格化しないのは、文学を用いた場合の英語教授法に関する固定観念や実用英語教育推進に対する経済界の要請などがあることが論じられる。第3章では、先行研究を踏まえ、文学教材使用の意義が言語に関するもの、感情や人間形成に関するもの、文化に関するもの、その他に分類され、それらの主張に対するEdmondsonらの反論が紹介される。その上で読解や評価の難しさをはじめとする、文学教材の使用にかかわる諸問題が議論される。第4章では、次章で採用することになる事例研究の方法論が説明される。まず、中心的な研究手法が文学教材を用いた授業の観察および実践であり、その質的な記述を、授業の履修者に対するアンケート調査の結果の量的分析で捕足する混合メソッドを採用する旨が述べられる。実際の授業事例を記述するに際して発生しうる研究倫理的な問題の処理に関する配慮も本章に記されている。

第5章が本論文の核となる事例研究である。ここでは、著者自身が授業者となっているものも含め、研究対象となる大学英語授業の22の事例が(1)伝統的な教授法を用いた(主として名作を精読していく)もの、(2)Language-based approachesを取り入れた(児童文学

などを用い、文学読解への導入となる言語活動を重視した)もの、(3) Communicative Language Teaching を用いたもの、(4) Composition で文学を扱ったもの、(5) 多読 (Extensive Reading) の教材として文学を扱ったもの、(6) English for specific/academic purposes (ESP/EAP ; 学術など特定の文脈における英語使用を目的とした英語教育) の中で文学を扱ったもの、(7) マルチ・メディアを用いたもの、(8) 言語横断的授業で文学教材を用いたもの、という8つのカテゴリーに分けられ、それぞれの授業の内容と学習者の反応が前章で説明された方法論によって記述される。第6章では、前章の事例研究の総合考察として、第3章で分類された分類にしたがってそれぞれの授業事例における文学教材使用の意義が検討、確認され、文学教材を使用するに当たって克服すべき問題点が議論される。最終章の第7章では、これまでの章の内容が研究の反省点と課題を含めた形で要約され、文学教材は学習者の英語習得ばかりでなく人間的な成長をも促すものであり、日本の英語教育の中で重要な役割を果たし得るとの結論が示される。

従来、英語教育における文学教材の使用の是非が議論される際、教養対実用の二項対立の図式に基づく個人の経験論が中心であった。また、文学教材の使用は、往々にして日本の伝統的外国語学習法／教授法たる文法・訳読と結び付けられることが多く、この学習法／教授法に対する批判がそのまま文学教材使用への批判を引き起こしてきた。しかしながら、現実には文学教材はさまざまな形で英語の授業で用いられてきたのであり、たとえ大学という限定的な教育機関の中とはいえ、その多様な使用例をここまで長期にわたって丹念に観察し、記述・分析した論文はかつて存在せず、その功績は審査員一同が大いに評価する点であった。一方で、辞書や文学作品に関する書誌情報の提示の仕方が、文学研究の基準からすると正確さを欠くこと、授業に関する履修者のアンケートにおいて授業に対する好意的な反応が出るのは当然であり、それを以て文学教材の効果の証明とはならないことなどが問題点として指摘された。しかしながら、これらの問題点は先に記した本論文の価値をいささかも損ねるものではない。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。